

令和6年3月31日

小金井市長
白井 亨 様

提言「市の文化的価値を守るための美術館のあり方について」

小金井市立はけの森美術館運営協議会
会長 鉄矢 悦朗

この度、第9期運営協議会委員（任期：令和2年度～5年度）より小金井市立はけの森美術館の4年間の活動の評価と現状を踏まえ、以下のとおり提言する。

【4年間の評価と現状】

- 1 全体の運営について
- 2 事業内容について

【提言】

「文化的価値を守り、生かすために」

- 1 施設の設備の修繕・建物の改修・メンテナンスが必要
- 2 美術の森緑地の剪定・管理が必要
- 3 文化的価値を守るための「適切な人員配置」を求める
 - ・常勤職員の配置
 - ・働き方改革を念頭にした人員配置
- 4 文化的価値を活かすための美術館と2つの文化財の連携・活用を求める
 - ・市のビジョンの明確化
 - ・行ってみたいと思ってもらえる工夫

【4年間の評価と現状について】

限られた人員・予算のなか、民間の助成金を獲得する等、可能な限りの努力を重ね、魅力的な展覧会や特色ある関連イベントを実施してきた学芸員と職員に敬意を表したい。事業内容については、展覧会、教育普及事業、そして調査・研究とも年々充実してきた。しかし、施設の老朽化、そして運営体制の脆弱さなどについては、今回も重ねて求めざるをえない。

1 全体の運営について

前回の提言からの4年間は、美術館の運営においても新型コロナウイルスの影響を受け、対応に追われた時期である。そのようななかでも、限られた人員・予算のなか、民間の助成金を獲得する等、可能な限りの努力を重ね、魅力的な展覧会や特色ある関連イベントを実施し、市の文化的価値が詰まった美術館を運営し続けてきたことは高く評価される。

2 事業内容について

(1) 企画展覧会・所蔵作品展

久しぶりに現代美術の展覧会を実施したこと、とくに茶室「花侵庵」を展示会場として使用する「花侵庵と現代作家 No.1 志村信裕」は前回の提言でも課題としてした茶室の活用につながる新しい試みであり、たいへん好評であった。「花侵庵と現代作家」はシリーズ化して、はげの森美術館特有の企画として継続することを求めたい。また、「笹川治子〈中村研一作品とともに〉 届けられた色」展（令和5年度開催）では、現代美術家の笹川治子が本展に向けて中村研一作品を起点とした新作を複数制作、発表し、さらに1階の光庭や平素は非公開の2階ラウンジなど、館内外の空間を網羅的に使い、当館所蔵の中村研一作品多数含めて展示を構成する、というこれまでにない試みを図った。来場者からは、「引き続き、現代美術の展覧会を楽しみにしている」との期待に加え、「中村作品ひいては美術館の違う一面をみた」などの声が寄せられた。新たな客層に対する中村作品の紹介の機会となっただけでなく、当館を知るリピーターからの好意的な反応も得ることができたともいえる。広報についてはSNSが少し弱いと感じた。

(2) 教育普及事業について

全校で実施している鑑賞教室、そしてギャラリートーク・ギャラリーコンサートはぜひ継続して開催してほしい。また、展覧会ごとに行うイベントも高評価であり、地域と連携した特色あるワークショップやトークイベントも面白い。令和4・5年度市町村立美術館活性化事業 第23回共同巡回展 福岡アジア美術館蔵「うるおうアジア—近代アジアの芸術、その多様性—」展（令和5年度開催）では、関連企画として、東京外国語大学の橋本雄一准教授によるレクチャーを実施した。美学や美術史以外の視点から本展にアプローチし掘り下げる内容で、参加者からは今後も様々な分野の専門家や研究者を招聘した関連イベントを開催して欲しいとの感想が上がった。大学や専門学校等、複数の教育施設が近隣にあるという当館の立地を活かし、これまでにない「学びの場」の提供についても積極的に行いたい。地域の人々に愛される美術館として成長しつつあると高く評価する。

(3) 作品の収集、調査、研究等について

学芸員の頑張りによって中村研一研究の最前線にいてことで、作品の寄贈をいただける機会も次第に増えてきている。この4年でも多くの作品を寄贈いただいた。今後は、より学芸員が研究にさける時間を増やすことと、作品を修復するための予算が必要といえる。

【提言】「文化的価値を守り、生かすために」

美術館は「文化的価値の詰まった場所」である。小金井市には、茶室「花浸庵」と旧中村研一邸という2つの文化財が隣り合っている。その「文化的価値」はそこにある「作品」「文化財」「人的資源」そのものを守ることによって、またそれを活かし守るべき「人」を支えることによって守られていくと考え、今後のあり方を提言したい。

1 施設の設備の修繕・建物の改修・メンテナンスが必要

この4年、設備が度々故障をし、修繕を必要としている。

とくに冷暖房や湿度の管理、漏水等、作品の保護に必要な設備の故障については、修繕が必要なことは言うまでもない。修繕・改修が必要な部分については早急な対応を要望する。また、美術館にある作品は替えのきかない高額なものばかりであり、一般の施設のように「壊れたから直す」というやり方ではいつか大きな損害を被ることになりかねない。

「予防上必要なメンテナンスを行う必要がある施設」であることを認識する必要がある。展示室の壁面については、財団時代から塗り替えも、クロス張替えも一度もしていない。一般的に美術館では、壁面の塗り替えは、5年に1回、クロス張替えは10年に1回が普通である。あと少しで開館20周年を迎えるいま、こうした修繕についても計画的に実施していくことを要望する。

2 美術の森緑地の剪定・管理が必要

平成30年度に市内の特定非営利活動法人が行った美術の森緑地の植生調査結果によると、予想よりはるかに多く高木化しており、その密集度は、きわめて高く、調査のなかでも防災上の問題点が指摘されている。この4年間も定期的に高木剪定を実施してきたが、引き続き善処していただきたい。旧中村研一邸主屋及び茶室「花浸庵」が国登録有形文化財になったということチャンスを捉え、美観上もきちんと整備し、美術館来館者増につなげることを要望する。

3 文化的価値を守るための「適切な人員配置」を求める

常勤の学芸員がいないこと、学芸員の人数が他市と比べて少ないこと、専任の事務担当職員が不在であることは、前回の提言にもあげたが改善が見られない。これでは、今後の美術館事業の発展など望めない体制である。会計年度任用職員のみ体制では、5年ごとに新しい学芸員に入れ替わるため、せっかく中村研一の研究をした学芸員をしても長期的な研究もできず、発展的な研究も望めない。そして5年で「育てた」人材を常に放出することで、育てる側の人材も不足してしまう悪循環がある。

週4日勤務の会計年度任用職員2名で、市役所を超える週6日の営業をしなければいけない体制では、日々の運営だけでも精一杯な状況が続いている。この体制は開館当初から続いているが、時代は令和であり、働き方改革が常識となった今、開館当初の人員体制で良いはずがない。あらためて運営体制の見直しが急務である。もし、人員を増やせないのであれば、休館日を増やす等運営の見直しを図られたい。

4 文化的価値を活かすための美術館と2つの文化財の連携・活用を求める

開館20周年を前に、見直すべき課題はつきないところであるが、今一度、市のビジョンを明確にし、美術館がきちんとその「文化的価値」を守りつづけ、その価値を発展させていく組織をつくり計画的な「成長」をつづけていってほしい。

はけの森美術館は、駅から遠く、休館が長い等、不利な条件を抱えている。その一方で、自然豊かな森のなかにあること、2つの文化財を隣接していることは本館の魅力でもある。年度末には附属喫茶棟が再開する予定がある。喫茶棟とも連携をしながらはけの森一帯の魅力を伝え「行ってみたい」と思ってもらえる場所でありつづけるため、文化財を生かしたワークショップ等、市民が気軽に参加できる「なにか面白いことをやっている場所」となるよう挑戦してほしい。